

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

謙虚さを力に

～地域や職場の仲間を支えられて～

地質学との出会い

理科の授業で、れき・砂・泥と水をビーカーなどに入れてよくかき混ぜて放置すると、粒の大きいものから先に沈んでいき、大きさごとに層ができる……。竹内は、自然の力が織り成す地層のきれいさと不思議さに感動を覚えたという。次第に、地層がどんな経過をたどって今の形になっているのか学問的に捉えたいという気持ちから、大学では地質学を専攻した。

卒業後、地質コンサルタント会社に就職した竹内だったが、受注者としてではなく、発注者として一つの業務に深く関わりたいという思いが強くなり、転職を考えた。そんな時、小学校の社会科見学で行った近所の一庫ダムを思い出した。初めて見る巨大なコンクリート構造物に「こんな大きなものを造ったなんてすごい！」と感じたことを思い出し、水資源機構の採用試験を受けるきっかけとなった。

受注者から発注者へ

竹内の現在の主な仕事は、設備の点検、施設補修など維持管理や農業用水分配の調整であり、初めての経験でもある。

「利根導水路は来年で通水50年を迎える歴史のあ

Profile

利根導水総合事業所

竹内 佑佳 Yuka Takeuchi

地質コンサルタント会社勤務を経て、平成27年1月水資源機構に入社。最初の配属先である豊川用水総合事業部で大規模地震対策事業に携わった後、平成29年4月から現職。

る施設です。半世紀にわたり休むことなく水を送り続けてきた水路は、劣化や損傷が認められるところもあります。それらを点検する中で、以前の職場での経験を活かして、計画を立案しています。水を安定して安全にお届けするために、日々責任感を感じながら取り組んでいます。」

また、水路施設の周辺にお住まいの方からの問い合わせも少なくなく、地域の人々とのコミュニケー



ションも大事な仕事の一つとなっている。「お問い合わせをいただいて、少しでも気になることがあれば、とにかく現場へ急ぎます。」と言うとおり、速やかに現場の状況を把握することに努める。的確な対応ができることはもちろん、こうした対応の一つ一つが水資源機構の信頼となり、地域に安心をもたらすのかもしれない。

また、水資源機構ならではの仕事とも言うべき、農業用水の分配も担当する。水利権に基づき、あらかじめ取水できる量が決まっている。天候によって田畑に必要な量が変わるので、水利権で認められている範囲を超えないように、必要な量を必要な時期に届けられるよう調整する必要がある。限りある水を効率的に絶えず平等に分配することは、水資源機構の仕事の中核であり、緊張やプレッシャーも伴うが、貴重な経験の毎日だ。

水資源機構の職員となって3年が経過した竹内。これまで、そして今の仕事の積み重ねを通じて前職との違いを改めて感じる。

「前職では発注者の計画を、現場の実情に合わせて実現できるように計算をやり直し、図面を引き直したりしていました。でも、計画の一部分を任せられるため、具体的にどういうものが出来上がるのか、最終的な姿や形がはつきり分からないこともあったんです。水資源機構に転職した今は、発注者として、造る施設の目的や全体像についてははっきりしたイメージがあります。これを維持、補修、調査などの計画へと反映させられることに仕事の面白さを感じています。」



独りよがりにならないように

「独りよがりにならないよう気をつけています。例えば、自分にとって大きな問題に思えても、他の人から見れば小さいことにこだわっていると見えることがあると思うんです。」と日々職員とのコミュニケーションを意識する竹内。そう思うのは、なぜなのか。



「ある上司は、初めて携わる仕事の進め方を丁寧に教えてくれましたし、ある先輩は、例えば、図面データはここに保存してあるといった細かなことまで教えてくれました。だから、水資源機構ではともに働く仲間に恵まれていると常に感じています。それなのに、独りよがりになって自らが正しいと思ってしまうともったいないんです。アドバイスをいただく機会をつぶしてしまうかもしれないですし、何より仕事のパフォーマンスが下がってしまうと思うんです。」

向上心をもって、謙虚に自らを見つめ直すことを忘れない竹内。その驕らずひたむきな姿に、彼女を囲む素晴らしい仲間たちと同じく、どこまでも前向きな「ささえる力」を感じた。



料理教室に通い始めて1年。教室でいろんな年代の方と出会い、お話しすることが楽しいと笑顔で話す竹内の得意料理は親子丼という。